

# 山正ニュース

株式会社 山 正		
本社・緑化部	岐阜市市橋4-5-15	Tel <058>271-4468
岐阜営業所	岐阜市市橋4-5-15	Tel <058>271-4466
可児営業所	可児市川合塚越345-1	Tel <0574>62-5228
富山営業所	富山県射水市大江207-1	Tel <0766>55-3882
飛騨営業所	高山国府町857-2	Tel <0577>72-4466

2013年8月号 (通巻51号)

## § 1粒剤を利用したセンチュウ類の防除について

～処理方法の登録追加で使用しやすくなった

ネマキック粒剤で効率的な防除を！～

近年ネグサレセンチュウやネコブセンチュウによる被害がかなりの頻度で発生するようになってきました。これは、同じ作物を連作することによって、被害を受けた作物の残渣が圃場内に蓄積し、センチュウの密度が高まってきていることによります。露地栽培では、ダイコンやニンジンなどでネグサレセンチュウが問題となっています。また、施設では、トマトやキュウリに発生した場合には大掛かりな土壌消毒を余儀なくされることもあります。

右の図はネグサレセンチュウとネコブセンチュウの代表的な被害の様子を示したものです。

ダイコンがネグサレセンチュウの寄生を受けると、表面に水泡症状の「つぶつぶ」ができて、商品価値を著しく落とすこととなります。また、トマトやキュウリの根に「瘤(こぶ)」を多数形成して根がぼろぼろになり、やがて地上部が枯死することになります。

これらの症状はいずれもセンチュウ類の寄生に対する農作物の反応として現れるものですが、やっかいな点は、一旦発生すると、汚染圃場になってしまい、防除が難しいことです。

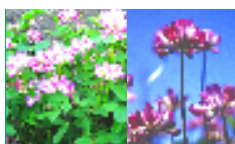
従来は密度が高まってしまふと、臭化メチル等による土壌消毒に頼っていましたが、右の表に示したように、**ネマキック粒剤**で手軽に防除する(次ページへ続く)

### ネグサレセンチュウとネコブセンチュウによる被害の様子

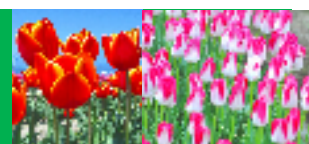
種類	被害様相	センチュウの形態
ネグサレセンチュウ	大根の水泡症状 	センチュウの全体像  頭部(口針を出す輪、矢印を指す)  尾部 
ネコブセンチュウ	トマト地上部の黄化・枯死  根部のコブ 	トマトに寄生するネコブセンチュウ  ニンジンに寄生するサツマイモネコブセンチュウ(腫成虫、矢印) 

(原図ネグサレセンチュウ:山正名畑、ネコブセンチュウ:写真で見る農作物病害虫ハンドブック;静岡果樹植物防疫協会による)

作物名	適用病害虫	使用量/10a	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	イミダホスを含む農薬の総使用回数
ばれいしよ	ジャガイモシストセンチュウ	15~20kg	植付前	1回	全面土壌混和	1回
かんしょ	ネコブセンチュウ		は種前		作業土壌混和	
だいこん にんじん いちご	ネグサレセンチュウ	15~20kg	植付前	1回	全面土壌混和	1回
なす トマト ミニトマト きゅうり メロン すいか きく 花き類・観葉植物 (きくを除く)	ネコブセンチュウ					



株式会社山正は、農薬・肥料・園芸ハウス・農業資材等の販売や、それに伴う農地・緑地・街路樹等のメンテナンス業務を通じ、地域農業や地域の環境緑地化への貢献を目指しています。



こともできますので、その方法を紹介します。基本的な使い方は

○野菜やいも類では植付前10アール当たり15～20kgの全面土壌混和  
ですが、今回新たに

○ダイコンとニンジンに対し、は種前に10アール当たり10kgで作条処理  
の登録が追加され、さらに使いやすくなりました。

また、キクや花き類・観葉植物にも新たに登録が追加されて使用できる場面が広がりました。センチュウ類による被害が顕在化しているところでは、是非お試し頂きたいと思います。

## § 2 コメについて考える⑤

### ～注目していきたい海外生産の動き～

日本農業新聞がこのほど報じたところによれば、米国カリフォルニア州産の短粒種をはじめ、外国産米を安定的に調達しようとする日本企業の動きが本格化しているとのことである（平成25年6月5日）。

米国産米の確保に本腰を入れて動き出したのは、シジシージャパンという中小スーパーの協同仕入れ会社で、今年度（2013年）初めてカリフォルニア州サクラメントの米農家との間で「コシヒカリ」600トンの播種前契約を結んだとのこと。同社では、米国産コシヒカリを国内の店頭で1kg当たり316円程度で販売できるものと見込んでいる。しかし、実際の仕入れ価格は農水省が開くSBS（言葉の意味ズームアップ参照）の結果次第により、競争が激しいと高くなるため、必ずしも思惑通りの価格で調達できるとは限らないことは織り込み済みで、安価での供給ということよりもむしろ将来を見据えた海外における「安定供給基地の確保」についての足がかりをつかみたいとするのが本音のようである。

一方で、TPPの本格交渉を前にアメリカのコメ農家も日本へのコメ輸出増を虎視眈々と狙っている（共同通信系配信記事・北日本新聞平成25年7月16日）。カリフォルニア州サクラメント郊外の広大な水田で栽培されている「カルローズ」という中粒種は、TPPで関税が撤廃されれば日本産の3分の1程度の価格で店頭と並ぶとみられている。カルローズのねばりや甘みは日本産のコシヒカリに及ばないものの、価格差を前面にした販売攻勢にさらされることは想像に難くない。栽培農家は「日本の食卓に載せることさえできれば、気に入ってもらえるはず」と自信をのぞかせており、業務用を中心にカルローズが引っ張りだこになるとの予測もある（同記事）。

これらの記事から思い浮かぶのは現在すでに中国や東南アジア諸国で栽培された多くの野菜類が低価格でわが国へ輸出され、量販店や外食産業での利用が進みつつある実態である。野菜類の場合は、日本の商社が海外へ出かけ、技術協力を行って生産されたものがわが国へ逆輸入されてくることも多いとされており、外国産米を確保しようとする商社の動きが「コメ」においても野菜類と同じようなことになっていかないか、その動向が気になるところである。加えて、これらの動きの背景にあるのは国内における担い手に不足が今後さらに進行すれば、いずれは海外生産のシェアが増えることを想定していることである。

農産物のTPP交渉の行方には大いに注目していきたいところであるが、コメについては聖域を守りつつ、担い手対策をはじめとする国内における生産体制を強化し、コスト競争でも外国産と勝負できるようにして、是非とも国内生産を堅持したいものである。

#### 言葉の意味ズームアップ；SBS（売買同時入札契約）

売買同時入札契約のこと。Simultaneous Buy and Sellの頭文字をとってSBSと略称される。制度の内容は、外国でコメを買い付ける商社と国内の卸売業者がペアを組んで入札に参加し、国が買い入れる「**輸入価格**＝外国産米の価格実勢」と、国から卸売業者に売却する「**売り渡し価格**＝同品質の国産米の価格実勢」を同時に表示、差額が大きい順に落札する。国が徴収する両価格の差額は、国産の保護に必要な関税や直接支払いの目安となる。現在ミニマムアクセス米（本誌通巻44号コメについて考える④参照）で輸入される主食用10万トンの輸入枠に対してこのSBSが採用されており、大手スーパーの西友や吉野家や松屋などの牛丼チェーンが輸入米を取り扱う動きを強めている。

（ワードBOX／西日本新聞及び日本農業新聞（平成25年6月5日）の記事を参考にした。）

§ 1 粒剤を利用したセンチュウ類の防除について  
～処理方法の登録追加で使用しやすくなった

ネマキック粒剤で効率的な防除を！～（名畑技術顧問）・・・1～2ページ

§ 2 コメについて考える⑤～注目していきたい海外生産の動き～（名畑技術顧問）・・・2ページ